

昔々、7人兄弟の家族がいた。末っ子はシフイシフイという名の弱々しい子だった。

或る日、家族みんなで旅に出ることになった。彼らは夜になるまで歩いたが、どこに行くのかわからないままで、結局は迷ってしまった。長男が小さな星を見つけたが、それは遠くの小さな灯りが輝いているようだった。彼は皆に言った。

「あの小さな光の方向に行こう。多分町や住人がいるはずだ」。

彼らは、歩きに歩き、歩き通して、小さな家につき当たった。彼らは家に入ったが、誰もいなかった。しかし、この家はあらゆる種類の食べ物で一杯だった。そこで彼らは座って食べ始めることにした。まさに食べ始めようとしたその時に、家の灯りが消え、雨と雷鳴と驟雨と嵐が彼らに襲いかかった。そこは精霊、ジンの家だった。

ジンたちが自分たちの住処に戻ってきた。灯りが消えた時、皆それぞれ隠れた。末っ子は一番いい隠れ場所を探して、屋根裏に隠れた。ジンたちは、家に入りながら、おかしい臭いに気がついた。

「ここには、我々のものではない臭いがするぞ」。

彼らは家探しをして、隠れていた家族全員を見つけた。あの末っ子を除いた全員を。ジンのひとりが、家の中に誰か、或いは何かが残っていると叫んだが、他のジンが、そんなことはないと言った。そうして彼らは行ってしまい、末っ子だけが家に残された。

灯りがまた点いた時に末っ子は隠れていた場所から出てきたが、家族が見えなかった。しかし、彼はテーブルについて食べ始め、家の中にある使えるものはみんな使った。

何時間か経って、ジンたちが住処に戻ってきた。家に入る時に灯りが消え（ジンは闇の中で生きており、彼らが来る時には灯りが消え、彼らが出る時には点く）、彼らは、前と同じように言い合った。

「ここには我々と違う臭いがする」。

そこで彼らは侵入者を探し始めたが、その時突然、末っ子が話し出した。

「僕はタマランの小さい種、僕の父さんはタマランの小さい種、僕の母さんはタマランの小さい種。僕がここから降りたら、お前たちを切り刻んでやる、お前たちとこの家にあるもの全部を」。

2人のジンが怖くなって逃げ出した。残りのジンはこの者と対決することに決めた。末っ子は繰り返した。

「僕はタマランの小さい種、僕の父さんはタマランの小さい種、僕の母さんはタマランの小さい種。僕がここから降りたら、切り刻んでやる、残っているお前たちを！」。

ジンたちは飛び出して、彼らの住処を捨てることに決めた。彼らに向かってきた者は、彼らよりも滅法力の強いジンだったと思いながら。

灯りがまた点った。末っ子は隠れ場所から出て、家の中にあつたすべてのものを持って、家族みんなに持ち帰った。

この話の教訓は、家族の中で末っ子が必ず役に立たないわけではなく、一番頭が悪くて、強くないわけでもないということだ。そしてそのことは社会においてもそうだ。年や文化や教育の有無がどうであれ、共同体に役に立つし、自己表現する権利を持っているのだ。